

中国六世紀の天台大師智顛以前に、すでに多くの仏教者が法華經を奉じ行じていたことはいうまでもない。とりわけ、三一六世紀初頭までの尼僧の伝記をまとめた『比丘尼伝』を調査すると、法華經奉持者が18名と群を抜いて多いことが注目される。それに次いで戒律関係典籍7名、涅槃經類6名と続く。その理由として龍女成仏があげられるようが、実はその記述を持つ提婆達多品は本来の羅什訳法華經(四〇六年訳)には存在せず、『出三藏記集』が示すように、法猷が高昌で得た提婆品の梵本を五世紀末頃訳出したものが後に羅什の法華經に合されたと考えられている。竺法護の正法華經(二八六年訳)に簡略な龍女成仏のエピソードがあるとはいえ、それゆえに提婆品欠品の羅什訳法華經も広く受け入れられたとすることに無理がある。事実、『比丘尼伝』には龍女に関する記述は一切見られない。

天台以前の法華經奉持盛行の要因を探る一つの方法として、經典内容からのアプローチではなく、法華經奉持者の伝記に共通して頻出する行業に注

天台宗成立以前の女性の法華經信仰

ぶしの荒井アップル

目し、歴史文化的観点から分析する作業が考えられる。たとえば法華經奉持の尼僧の行として頻出する蔬食の苦行がその一例で、この実践はすでに紀元前四世紀頃の文献にみえ、中国宗教研究の成果によれば、これは養生術や神仙術の中で、長生や不死、昇仙のための身体清浄化の方途として実践されていたという。こうした文化的な枠組みを持って見るならば、尼僧の蔬食実践も得道のため自身の清浄化を期待してなされた行為と捉えることができよう。また仏教実践において、当時の尼僧の清浄化への期待を最も良く受け止め得た仏典として法華經があったとも考えられる。

法華信仰と清浄観念を考える時、戒、懺悔、見仏などの要素も合わせて大乘仏教の伝統にさらに踏み込んだ分析検討を行わなければならないことはいうまでもない。しかし、中国の歴史文化的総合的な枠組みの中で法華奉持者の行業を位置づけるこうしたアプローチも、その議論の導入として有効であり得ることをこの例は示唆している。

(カルガリー大学非常勤講師)